

マスク越しのわらべうた

誰もがみな、マスクをつけて一日を過ごす。

保育者もまた、感染の不安を抱えながら、マスク越しにわらべうたを口ずさみ、マスクの裏で満面の笑みをつくって子どもと向きあっている。目元だけが見えている大好きな人がそこにいれば、密を求めてくる子どもたち。丹精込めた安全な給食を、飛沫に気をつけながら、子どもたちとの食卓へ運ぶ。換気・消毒・衛生管理が頭から離れることはない……。

園内で一人でも感染者が出れば二週間前後の自宅待機が即決まってしまう緊張感の中で、社会からの断固たる開園要請にこたえ続ける。「とにかく感染させないように」との上からのお達しで、「この夏のプールは全面禁止にします」となった園の子どもたちは、お迎えが来るとスイミングに向かっていく……。その後ろ姿をやるせない気持ちで見送る保育者。「飛沫が飛ぶから」と、「絵本や紙芝居は読まないように」「うたは歌ってはいけません」なんて、「ホント!？」と耳を疑うような「ルール*」が、いたるところで増殖していくカオス。自分たちの行っている対策は、科学的にどう実証されているのだろうか？ そんな疑心暗鬼が渦巻く保育現場。

日常はあっという間に「非日常」にとって代わり、少々感染拡大が下火になったところで、もうそんなに簡単に誰かといっしょにご飯を食べることもできなくなってしまいました。二年前にこのパンデミックがはじまったとき、「どうせすぐに終息するだろう」と思っていたのは私だけではなかったと思います。それが今では、非日常だったはずのものが「日常」となり、湧き上がる「ツナガリタイ」という気持ちに、やすやすとふたをしてしまいがちです。まさかこんな時代が到来するとは……。

たしかに便利なこともたくさんできました。産休中でも聞きたい研修がオンデマンドで受けられたり、時間やお金を使って遠くのところに行かなくても全国の仲間に画面越しに会えたり、夜子どもを連れて会議の場所に行かずとも、子どもに食事をあげながら父母の会の会議や懇談会ができたりもします。「このやり方になってよかった」―そう思うこともたくさんあります。しかし、その後ろ側で失われたものはないだろうか？ パンデミックも三年目に入り、そのことの意味の大きさにやっと気づいている自分がいます。

あんなにも大切にしていた、おしゃべりして子どもの成長を確かめあい、みんなで苦しむことも悲しいことも共有して笑い飛ばしていた空気感が、いつの間にか一変しています。マスク越しの対話や画面越しの語らいでは、とても苦しんでいるかもしれない相手が目の前にいても、敏感に感じることはむずかしい。直接会っていれば伝わる無言のメッセージも、想像力がなければ推し量ることもできません。見える部分だけで判断してはならないことを、何度かの手痛い失敗が教えてくれました。そんな“人見知り”がちな「日常」に

よって、全国のあちこちの保育現場で大切に育まれてきた文化風土が、私たちが思っている以上に大変なことになっているかもしれない。

*保育士でイラストレーターの菊池刀子氏は、論考「保育士が見た新型コロナ禍の保育現場―感染防止という名の思考停止への危惧」(「論座」二〇二一年七月二十二日配信)において、実際の効果や子どもへの影響、コロナ以前からの人手不足などの問題が問われないまま、さまざまな「ヘンテコルール」が横行する状況を鋭く問題提起しています。